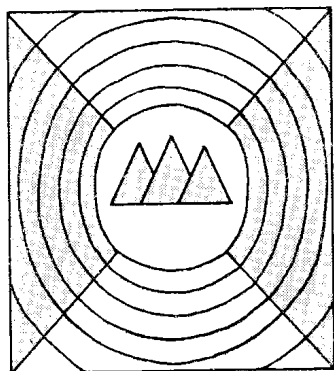


国文学研究資料館共同研究報告 四

国文学研究資料館編



文学における「向う側」

国文学研究資料館共同研究報告 4

文学における「向う側」

定価 2,800 円

昭和 60 年 6 月 24 日 印刷 © 1985 *National Institute*
昭和 60 年 6 月 29 日 発行 *of Japanese Literature*
printed in Japan

編 者 国文学研究資料館

発行者 株式会社 明治書院
代表者 三 樹 彰

印刷者 図書印刷株式会社
代表者 小 林 清

発 行 所 株式会社 明 治 書 院

東京都千代田区神田錦町 1 の 16 郵便番号 101

電話 (03) 292-3741 (代) 振替口座東京 3-4991

序

国文学研究資料館共同研究報告第四として、『文学における「向う側」』を刊行することになった。

当館共同研究報告の1は『初雁文庫主要書目解題』（昭和五十六年三月）、2は『酒田市立光丘文庫俳書解題』（昭和五十八年一月）である。両者とも「書目解題」であるが、歌書を中心とする写本、俳書で大半が版本、という対象に即して、それぞれの解題がいかにあるべきかを研究し、それに基づく成果として発表した。また3の『連歌資料のコンピュータ処理の研究』（昭和六十年三月）は、連歌資料の情報データベース化とその索引作成方法との研究で、その検討の結果を小規模の資料に適用して試作した「連歌作品目録・同索引」を付して刊行したものである。

本書はこれら従来の三冊とは趣を異にしている。すなわち論文集であり、また、これまでのものが当館の業務に関連の深いものであったのに対して、これは直接の業務にはかわりのないテーマによる研究の報告である。

当館では昭和五十二年度以来、毎年一名（五十七年度は二名）の外国人研究員（客員教授）を招き、館内の研究者とともに研究を続けて来たが、近年館外の研究者も交えるようになり、機熟してここにその共同研究の成果を世に問う運びになった。

ブリティッシュ・コロンビア大学（カナダ）のキンヤ・ツルタ教授は、日本近代文学に関する数々のすぐれた業績によって令名が高い。当館は昭和五十八年度の外国人研究員（客員教授）としてツルタ教授を迎え、同教授の「文学における「向う側」という発想を中心に、館外より共同研究員として徳江元正国学院大学教授・平川祐弘東京大学教授の参加を得て、数名の館内研究者と共同研究を行なった。昭和五十八年秋、ツルタ教授は任期を終えて帰国されたが、翌五十九年初夏、日本学術振興会の援助により再び来日されたので、研究の最終段階のとりまとめのため、この共同研究を継続することにし、その際、前年度において発表と討議をお願いした芳賀徹東京大学教授も新たに共同研究員として参加した。このような共同研究をまとめたのが本書である。

当館ではいくつかの共同研究を並行して実施している。その成果がまとまるに従って、1・3のような報告を引続き刊行するとともに、この4のような報告をも随時刊行する所存である。本書が従来共同研究報告と異なる面を持っているので、ここに一言した次第である。

終わりに、ツルタ教授をはじめ、この共同研究に参加した方々、そしてその成果を論文にまとめて御寄稿下さった方々に深甚なる謝意を表する。

昭和六十年五月

もくじ

序……………	小山弘志……………	一
「向う側」の文学……………	鶴田欣也……………	五
異界・内面・権力……………	百川敬仁……………	三七
説話からみた他界……………	徳江元正……………	六七
東と西の桃源郷……………	平川祐弘……………	八三
——ハーンの中国靈異譚の再話『孟沂の話』を手掛りとして——		
大正日本の小桃源……………	芳賀 徹……………	一三五
——佐藤春夫作「西班牙犬の家」をめぐって——		

異郷の母たち

奥出 健……………二七二

——『伊豆の踊子』と『雪国』——

日本近代文学における「向う側」成立の条件……………山中光一……………二〇五

西洋文学の「向う側」……………鶴田欣也……………二五二

あとがき……………福田秀一……………二六九

「向う側」の文学

鶴田欣也

私のいう向う側というのはこちら側と対比されて、発想される芸術的な空間であって、実際に存在するものではない。こちら側の現実が貧しければ貧しいほど、向う側は豊かになり生き生きとしてくるといふ因果関係がある。向う側はこちら側の補償の場でもあり、幻想の空間でもある。したがって、向う側では時計の針が正確な時を刻まない、早くなったり、遅くなったりするが、停止してしまうことも多い。また、針が逆転して過去に遡行することもしばしばある。空間的にいえば地図に引かれた線が役に立たなくなるところでもある。しかし、この空間の一番大きな特徴は因果律が働かなることであろう。こういうことをすれば、ああいうことが必ず起こるといふ自然の法が一時お預けになる場所である。

文学はこういう向う側と緊密な関係にある。緊密な関係どころか向う側そのものだということもできそうである。文学とは日常現実の補償だという理論もある。文学を日常現実と対立して捉える見方もあるが、日常現実の補償という発想から見れば、対立よりもむしろ相互関係の要素が濃くなっている。

この点で小説というジャンルは一寸厄介な文学形態の一つだといわなければならない。なぜ厄介かというと小説が発生した状況が詩の発生状況と全く違っていたからである。小説は十九世紀の西ヨーロッパの市民の台頭と共に出来上がった芸術形態であって、市民達の日常性、現実性、科学性、合理性等と堅く手を握っている文学なのである。したがって、小説はどちらかといえば写実主義、自然主

義、倫理主義の色濃い文学であって、日常の地面から飛び立って、向う側という空間に行きにくい形態である。詩に較べて小説はこちら側の文学といえる。小説は日常現実と対立することで、補償を手渡すというよりは、むしろ、日常現実に寄り添うことで成立する要素が多分にあった。二十世紀に入ると、この部分がかなり弱まって、現実との対立が見られるようになるが、一般に小説という文学形態はその言語、構成からも現実とは手が切れてはいない。

小説という文学形態が日本に入ってくると市民性を盛る器としての働きは殆どなかったといっている。近代市民としての成長発展の問題を扱う教養小説（ビルデングスロマン）を例にとっても、日本での例として挙げられる志賀直哉『暗夜行路』、宮本百合子『伸子』、『道標』、芹沢光治良『人間の運命』は、『暗夜行路』を除いて文学的香りの高いものではない。『暗夜行路』の主人公は最終段階で自然の中に退行するのであって、市民的な意味での成長があるとはいえない。自然主義、写実主義的要素は私小説に発展解消した。自然主義の基底にある科学実証主義は日本で育つ筈もなく、それは日本の地味にふんだんに含まれている抒情性によって追いつかれてしまった。

日本近代文学史では抒情性は大体敵役をあてがわれている。日本近代文学が西ヨーロッパ文学の輸入で成立したため、西ヨーロッパの批評標準でそれを判断したのは自然の成り行きであった。近代市民性を高揚する筈の小説の中の抒情性はアナクロニズムであり、封建制の残滓^{ざんし}であった。そのため、厳しい批判の対象となってきた。しかし、日本の小説が翻訳を通して西欧に紹介されたとき、一番高

く評価されたのは日本の古代から脈々として続いてきた抒情性であった。皮肉でもあるが、文学の性質を考えれば当然ともいえる。文化の深層の地下水を吸い上げて咲いた花でないと真の感動を呼ぶ筈がないからである。

抒情性と近代個我とは対立関係にある。個我が確立すればするほど、抒情性の余地はなくなっていく。個我が溶解したり、亀裂が入ったりしたときに、抒情性の可能性が出てくる。そうでないと個我の中にある魂の感動が流れ出てこられない。

私は北米で日本の近代小説を教えているのだが、あるとき、妙なことに気がついた。西洋の小説は主人公がなにかの意味で成長する過程を描いたものだといえる。始めから終わりまでには時間の経過があり、その点では主人公の旅であって、旅の終わりには始めと較べて主人公の内部になんらかの変化がなくてはならない。変化はしばしば精神的な成長を意味する。すなわち大人になるための旅である。ところが、私の教えている英訳された日本の小説にはそれが少ないことに気がついたのである。

また、旅があるとする、それは大人になるための旅ではなくて、むしろ、大人が子供になるような感じのする旅があるのに気がついた。退行の旅といってもいいし、母胎回帰の旅といってもいい。しかも、芸術的香りの高い作品にそれが多くように思えたのだ。日本の小説でも成長を示す主人公はいるのだが、中途半端の感じを与えたり、文学的な感動が稀薄だったりであまり感心しない。『伸子』、『道標』、『人間の運命』を例に挙げておいたが、大江健三郎『個人的な体験』をそのリストに加えて

もよい。

谷崎潤一郎『癡癡老人日記』は抒情性とはあまり関係がないが、退行のテーマを扱った小説で成功を収めた例である。身体も自由に動かせない老人が息子の嫁を媒介にして、赤ん坊に帰っていく過程を確かな筆致で描き出している。その過程で主人公は生き生きとした生命感を発揮し、しかも、個性を失わない。むしろ、退行をしながら、ある種の個性を造り上げていくという不思議な作品である。日本の小説の主人公には個性が欠けていて面白くないという北米の学生の批判に私は卯木督助を挙げて答えることにしている。

抒情性の豊かな作品としては川端康成『雪国』がある。ここでは駒子という中心人物に焦点が当てられてはいるが、雪国という自然が瞬間的ではあるが主人公の個我の溶解に大きな役割を果たしている。退行の過程で生き生きしてくるのは主人公の島村ではなくて、彼をとりまく周囲である。駒子であり葉子であり、また雪国は一段とその美しさを増すのである。ここでは退行が女性や自然を媒介にした美の旅になっている。退行や個我の溶解が美しさと結びついていることに注意したい。これはよく引用される『暗夜行路』の大山のシーンにも同じことがいえる。

一般論になるが、西洋の小説の多くは主人公が自己の環境と戦いながら、次第に成長し個我を確立させていく。そこで読者は個我確立の過程に参加する喜びを味わうわけである。北米の学生の一部が日本の主人公の退行現象に戸惑いを見せるのは無理もない。大づかみにいえば北米では退行は逃避で

あり、猥褻でありまた死に対する指向性をもつものとされているからである。個を確立する健康な喜びはあっても、個の崩壊に歓喜があるはずはないのであろう。西洋特に独立戦争を経て、開拓時代を持ったアメリカでは退行と底辺で手を握っている抒情性とか美とかいうものを白い眼で見えきたようなところがある。荒い自然や人間の中でいかに生き抜くかということに興味の中心があった。したがって彼等の小説の主題は倫理性の濃い生存のテーマである。生存とは闘いの姿勢を示唆する。闘いという言葉がアメリカ文化のキー・ワードである。闘いの状態で抒情性や美は禁物である。日本でさえ戦時中に振り袖を着て外に出た娘さんがどのような扱いを受けたかを考えれば、生存と美はいかに相容れないものであるかが分かる。ただ、日本とアメリカの違いは生存がアメリカ文化の中心部に在り、平和の時でさえも、何かと闘っていないといけないようなところではないだろうか。振り袖によって代表されるものは平和の時でさえ白眼視されるようなところがアメリカにはある。

カウボーイ・ハットを被ったジョン・ウェインが振り袖の日本の娘と一緒に撮った写真を見たことがある。二十五、六年も前のことなのではつきりは覚えていないのだが、日本の女優さんが彼を映画のセットに訪ねた記念撮影だったのだろう。あまりにも釣り合いのとれない写真だったので私の脳裏に残ったらしい。英訳された『雪国』がアメリカで結構読まれているらしいという話を聞いたとき、私はこの写真のことを思い出した。

朝鮮戦争、ベトナム戦争を経てアメリカも一部変わった。生存文化も退行にも少し眼を向けるよう

になった。一方、明治以来生存を前面に押し出してきた日本もそれを主題にして小説を書く作家を持つようになった。ジョン・アブダイク『走れウサギ』と大江健三郎『個人的な体験』を較べてみるとそれがよく分かる。ウサギは責任をとらず、成長を拒否し、バードは責任をとって成長しようとする。少なくとも表面ではそのように見える。今後両方の文化がどのように変わっていくのか占うことはできないが、こと成長や退行に関してはどれか一つだけに固執する態度は崩れていくような気がする。一日には昼と夜があり、人には生と死があり、意識と無意識がある。生存を強調する文化でさえ、退行や死がいかに生存にとって必要な要素かということが解り始めてきたようである。

※

向う側は一日の夜の部分である。夜の部分を芸術的密度の極めて高い作品に仕上げたものをまずとり上げてみたい。この作品を少し考察してから、他の向う側の作品に触れるつもりである。その後、西洋や東アジアにある作品で向う側に似たものを取り出して比較し、日本の向う側の作品群の特徴とその意義を探ってみたいと思う。

泉鏡花の代表作『高野聖』は一九〇〇年の出版である。幸田露伴『対欄體』に較べると十年遅れている。向う側を扱った作品ではこの二作が一番早い。『高野聖』の方は構造的にはより複雑であり、芸術的な完成度も高い。その上、向う側のテーマを構成する重要な要素を全部備えている。したがって『高野聖』をその代表的な例として考察してみる。

この小説は語り手が汽車の中で知り合った僧侶から若い時に体験した不思議な物語を聞くという形式をとっている。彼は高野山の修業僧で諸国を行脚していたが、飛驒から信州へ越える深山で蛇や山蛭に悩まされた後、ようやく一軒の山家にたどりつく。縁側に白痴のような少年がだらしく座っている。案内を乞うと、小造りの美しい婦人が出てきて、一夜の宿を引き受けてくれるという。その晩いろいろ不思議なことが起きる。彼女に伴われて谷川に沐浴に行くと、婦人は自らの手で水をかけて僧の身体を洗ってくれる。後からひとくつついている彼女の身体で僧は花びらの中へ包まれたようだと思う。谷川の附近には蕨、大蝙蝠、小猿などがいて、婦人にまとわりつくのだが、叱られると消えていく。谷川から帰ると、庭で馬が暴れている。婦人に仕えている親仁がいくら取り静めようとしても、駄目である。婦人が着物を脱ぎ、馬の前脚の間を潜って、下腹からさっと出ると、荒れ狂っていた馬がとたんにおとなしくなる。

夕飯時には婦人はいがいしい女房ぶりを示す。なんとなく奥ゆかしい、上品な、高家のふうもある。白痴はだだをこねて、大きな老沢庵ひねたくあんにかぶりつく異様なシーンもあるが、食後、白痴はこの世のものとも思われない清らかな声で「木曾の御嶽山」を唄って、僧を驚かせる。

夜がふけても僧はなかなか寝つけない。戸の外にももの気配がする。多数の獣や鳥が山家を取り巻いている。鼻息や羽音が戸板一枚をへだてて聞こえるほどである。明らかにこの家の女を求めて集まり寄ったもののようである。恐ろしさのあまり僧が寢床の中で息を殺していると、隣室の美女のうめ

き声が聞こえる。女は獣達を叱ると、戸外ではどよめきがあり、家が揺れた。僧は思わず陀羅尼を唱えて一心不乱である。

翌朝、僧は山を下るが里近い滝までくると、山家の婦人が恋しくなり、自分の僧侶としての生活が空しく感じられる。引き返そうかと迷っていると、婦人に仕える親仁に出会う。親仁は僧に婦人の正体を明らかにする。女は近在の医者^{いしや}の娘であったが、神通力を時つ魔性の者であり、旅の男をもてあそんだ後に、息をかけて獣に変えるのだと教える。僧が庭で見た暴れ馬も実は僧の旅先で知り合った富山の薬売りであったが、それも、このように土産の鯉に化けてしまったと親仁は告げる。そして、

「いややがて、この鯉を料理して、大胡座^{おあぐら}で飲むときの魔神の姿が見せたいな。」

といって、僧の背中を一つ叩き、鯉を提げたまま見向きもせず山路を行ってしまう。

『高野聖』の梗概が長くなったが、これを一つのテーマとして簡単にまとめてみると次のようにいえないだろうか。ある若い男が自分の生活空間を離れ、旅をしているうちに、特殊な空間に迷いこむ。そこで美しい女性に出会い、彼等の間に何かが起こり、そこを男が去っていく。すなわち異性のいる特殊空間体験の物語である。この場合その空間は深山の森の中であり、上の洞^{かほ}と呼ばれる谷間である。女は美しく、優しい。上品でもありまた神秘的な魔力をも持っていて、恐ろしい要素もある。優しさの要素を取り出して、分析してみると、沐浴をさせてくれる。傷を癒してくれる。食事を用意してくれる、床をしつらえてくれる等いわゆるケア・テイカー（世話する者）の影が濃くなり、母親の

像が浮かび上がってくる。その上この女には少年のような白痴が側にいる。知能と引き換えに清らかな声を持った人物だが、主人公のドッペルゲンガーの役を受け持たされていることは明らかである。僧の深層の願望を担って女の側に残り、僧の社会的な自我は名僧となるべく行脚を続ける。特殊空間の形態、女の属性、白痴の存在などつき合せて、考えてみると、この主人公の旅には時間遡行があり、一種の母胎回帰の要素があることが明らかになる。

旅する男、非日常空間、ケア・テイカーの女、時間遡行という要素を持った小説は日本近代にはかなりあるような気がしたので調べて見ると、洩れたものもあるかと思われるが、ざっと次のような年代順のリストができた。

- | | |
|---------------------|-----------|
| (一) 幸田露半『対顔體』 | 一八九〇 |
| (二) 泉鏡花『高野聖』 | 一九〇〇 |
| (三) 夏目漱石『草枕』 | 一九〇六 |
| (四) 芥川龍之介『素戔嗚尊』 | 一九二〇 |
| (五) 谷崎潤一郎『蘆刈』 | 一九三二 |
| (六) 川端康成『雪国』 | 一九三五—一九四八 |
| (七) 太宰治『お伽草紙「浦島さん」』 | 一九四五 |
| (八) 安部公房『砂の女』 | 一九六二 |